

一八八三年十二月二十八日(金)

この日は、校長にとつて忘れられない一日となつた。

この日、タクール、聖ラーマクリシユナは彼を五聖樹パンチャバティの柱に連れて行き、多くの話をしてくださいつた。そして、はっきりと彼におっしゃつた。

聖ラーマクリシユナ「もうお前は、頭で考えるな。よく覚えておきなさい——お前が神様をどのように呼ぶか、その通りにあの御方は現れてくださるつてことを。自分に合つたようにあの御方を信仰しなさい。全ての道の目的地は神様で、誰だつて到達できるんだ。だけど、誠実でなけりゃいけないよ。これはギターにも書いてある。いつも神様を呼んでいるうちに、また信仰しているうちに、あの御方をもつと身近に感じるようになり、愛が目覚めてくるんだよ。あの御方に対して愛や信仰が目覚めると、神の恩寵で、無知から生じる我執エゴが心から消えてなくなるんだよ。

人は、自分の意志で何かする力なんて持つてないんだよ。全ては神様のお心次第だ。あやつり人形は人形使いの手であやつられて見事におどつているが、人形使いがいなかったら、ちつとも動かない！だから、よく考えて識別しなくちゃいけない。それでやつと、心から我執エゴが消えていくんだよ。

富や社会的地位のある人たち、裕福な人たちは、自我で溢れている。それで、神様を忘れているんだ。神様だけが真実で、他は全て偽りだ。このことをよく覚えていて、肩書きなんかには惑わされな

いでいる者は、あの御方を得るよ。何にも持っていない人だけが、あの御方を得られるんだよ」

校長は、我執エゴがある間は、神は覚されないということが理解できた。それから言った——

校長「このように感じるのは難しいことです。かなり幸運でなければこのような感じにはなりませんし、また、すべてを捨てることもできません。もう奴隷のような生活はこりごりです。今は、仕事だんだん少なくなつて、心が神のほうを向くように、そう望んでいるのです」

聖ラーマクリシュナ「だけど、お前は世俗の生活を望んでいたんだらう？ だからそうなったんだよ。だけど、心の中で捨てることが出来たら、それでいいんだよ。お前はどんな人間だか分かるかい？ ナーラダがみんなにブラフマン智を与え始めた。そこで、ブラフマーが、サナカ、サナータナなどに呪いをかけて、マヤーの罠わなに閉じ込めたのだ！ お前も少し、何か（訳註1）（カルマ）が残っていたんだね。だからそうなったんだ（家住者として生活しなければいけなかった。ポイッド（訳註2）の信者（お前）には、何か仕事）が与えられているんだよ。でも、期待をするんじゃないよ——期待すると苦しむからね。でもね、お

（訳註1）この話の背景となった神話は不明であるが、『ヴィシシュヌ・ブラーナ』では、ブラフマー神が創造した四神——サナカ、サナータナ、サナンダ、サナトクマールは、世俗的な事に関心がなく、禁欲的で子孫を増やそうとしなかった。これを知ったブラフマー神は激怒し、怒りのために眉間からルドラが生まれた。このルドラからそれぞれ十一人の男女が生まれ、夫婦となったとある。

（訳註2）ポイッドはマヘンドラ・グプタが属するカースト。職業に就いたバラモンで、医者などが該当する。生活のために金を稼ぐので、正規のバラモンよりは劣るとされる。

前はもう、全て上手うまくいつてるじゃないか！ 智識を得たら分かるよ。神が真実、普遍なるものが真実、神には偽りはない。過去、現在、未来にいらっしやる。また始まりも終わりもないサッチダーナンダなんだよ。この世界はあの御方の富。でもそれは、マヤー、魔術マジックなんだよ。

昨日の夜、お前について少し分かったんだ。お前自身にも分かつてくるよ。

それから、知っておきなさい。私とあのお方(ドッキネーシヨルのカーリー)は一つであるということ——。何の違いもない。彼女を想えば、いつも私のことを想っていることになるんだよ」

校長は一言も話さずに集中して聴いていた。

聖ラーマクリシュナ「お姿を信じるんだよ。お前たちは、形ある神を信じる側に属ほしているんだ。シャクティを信じるんだよ。ブラフマンであるお方がシャクティであり、大実母マなんだ。シャクティを認めないことには、ブラフマンがどんなものなのか誰も知ることなんてできないさ。シャクティがブラフマンの紹介者なんだよ。火と言えば何がわかる？ 燃える力だろう？ 火に燃える力がなかったら、火は何の役に立つだろうね？ 火と燃える力は別物ではないよ。ブラフマンとシャクティもそうだ。この二つを説明しようとする、二つの別々のものがあるように見えるが、実際には一つなんだよ。一なるものが多になつていっているんだ。これが神シヤクティの顕れだ。何の活動もしない時にはブラフマンと呼ばれ、二者なき一者だ。また活動が始まると、神の力はシャクティとしてその仕事をするんだよ。例えば、水が静かな時はブラフマン、またはプルシャと呼び、波が立つ時はシャクティ、またはブラクリティと呼ぶ。この世界ですること、聞くこと、感じることに、全てはシャクティの働きなんだよ。

ブラフマンがどのようなものなのか、シャクティに頼る以外に知る方法がないんだよ。

この広大な世界はあのお方のお遊び——シャクティの顕れだ。例えば、宝石とその光輝きかがやきのようなものだ。宝石の輝きで宝石だと分かる。そのように、シャクティのリーラーを見てブラフマンが分かるんだよ。シャクティがなかったとしたら、誰が彼(ブラフマン)を理解したかね？ また、誰が彼(ブラフマン)を信じただろう？ シャクティである力の影響で、彼はジャガデーシユワル、すなわち、世界の主グという名で呼ばれているんだよ。一にして多なるお方だ。活動がない時、彼は一つになり、活動が始まればシャクティが現れる。彼の無限のシャクティが活動し始める。この全世界にある全ては、一つの神の顕れだよ。力の凝縮がブラフマンで、力の展開がシャクティだ。瞑想、専心、修行、法悦、礼拝、信愛バクティ、聖愛プレマなど、全てはシャクティの活動だ。シャクティが分からせてくれなければ、それらについて、見ることも考えることもできない。シャクティが神の力の顕れなんだよ。シャクティのお陰で彼は偉大であり、彼をみんな崇拜してるんだ。シャクティに加護を求めないで、どうやって彼が分かると思うね？

ブラフマンは無形であり、属性グナもなく、見ることも考えることも及ばぬもの——。彼を呼んで何の役に立つ？ 呼んでも姿を見ることは出来ない。姿形のない者を瞑想して、何が得られるね？ ブラフマンとシャクティは不異おなじだ。ただ名前が違うだけなんだよ。宇宙が存在しなかった頃、ブラフマンは不可知だった。しかし、創造が始まると神シャクティの力が動き始めて、人間が認識できる思考の領域に降りてこられた。言い換えれば、属性をお持ちになった。ブラフマンはシャクティの維持者だ。支える

ものがなければ、シャクティはどうしていられようか？ 支えるものと支えられるもの（容器と中身）、違いはいろいろだが、実際は一つなんだよ。これを、^ミ思考を超えた違い^クという。

例えば一つの茶碗——これは、どこからか勝手に現れた、なんて誰も思わないよね。これを作った人がいて、これを作った力があつて、それで初めて現れた物なんだ。どんなものでも自分から現れてはこない。誰か作つた者がいて、その者に力がなくては何もできない。また、そのシャクティは、その源^{みなもと}なしには存在できない。すべてのお姿はシャクティから創られたんだ。カーリー、ドウルガー、ラーダー、これらは同じシャクティで、名前が違うだけなんだ。それぞれに違つた役目があつて、それに合つた名前が与えられているんだよ。また、シャクティのリーラーで神^{アツァクティラ}の化身も現れる。ブラフマンであるお方がラーマであり、クリシュナであり、シヴァであるんだよ。シャクティに頼らないで、どうやってブラフマンを覚^{さと}ることができると思うね？ 言葉を口にしてあのお方を呼ぶだろうか？ その音の力を借りて、彼を瞑想するだろう？ これら全てはシャクティの働きなんだよ。

お前はそのシャクティから生まれ、そのシャクティの力で動き回り、そのシャクティの力でブラフマンという言葉を知つた。そのシャクティの恩寵^{あまのまじ}であのお方を覚^{さと}るために熱心になつた。けれど、その母なる権化のシャクティを捨てたら、誰がお前を受け入れるというんだい？ 母親がいなければ、父親とは、また父親の愛情とはどんなものか、わかりっこないんだよ。大実母^{アマ}の愛情が子供たちにとって一番の愛情なんだよ。こんなに愛情深い大実母^{アマ}をおいて、父親のところはどうして行くんだい？ ^ムマール！ ジャナニー（生む者）！ ブラフママイ（梵の女神）！ ^{アマ}大実母^{アマ}を心の底から呼んでみ

ろ！彼女は、お前のその心の底からの叫びを絶対に聞いてくださるから——。大実母^{ママ}はもう、居ても立ってもいられなくなってしまうよ！

ブラフマン、シャクティの話をしているうちに、聖ラーマクリシュナはそのシャクティと一体^{サマ}（三昧）になられた。そのお姿は光り輝いていた。彼は喜びにうち震えた声で、校長のために祈り始められた。「マー、彼を目覚めさせておくれよ。でなけりや、どうして他の人を目覚めさせることなんか出来よう。何で彼を世間に置いておくんない？世間に置いて、この世の苦楽を味わわせないと、彼は火がつかなかったとでもいうのかい？ねえ、マー、そのお姿を一度見せてやっておくれよ。そうじゃないと、どうしてこの世で生きていけようか？」

聖ラーマクリシュナの神々しいお姿、子供の様にマーに祈られる姿を見て、校長は我を忘れてしまった。信者に対してなんとという無限の慈悲なのだろう！

平常の意識に戻られた聖ラーマクリシュナは、またおっしゃった。「バクティ、信仰が全てだよ。でも、誠実でなければいけないよ。この信仰を持つんだよ。そしてもう、頭で考えるのはやめろ。今はこの指示に従うんだぞ。今はこれだからな！そうだ、お前の態度はどんなだい？」

校長は口もきけずにいた。すると、タクルが自分でおっしゃった。

聖ラーマクリシュナ「お前の態度は二つだね——ブラフラーダのような^ダ召使^{ガウリ}の態度と、梵我一如^{ワット}の態度だ。（校長の態度を言い当てたことに言及して）あのね、ハズラーはね、わたしが人の心の内が読めるって言ってたものさ。私はマーに、全ての聖典に何が書いてあるのか知りたいってお願

出したんだ。マーにね、『全ての聖典に何が書いてあるか教えておくれ！』マーが教えてくれることを信じるから——』って言ったんだ。そしたらマーは、どんなに色んなことを教えてくれたことか！どんなに色んなことを見せてくれたことか！でもこんなことは、あんまり人に言うんじゃないよ。

神の御名みなを唱えなけりゃいけないよ。いつもできなくても、とにかく朝夕、あのお方を呼びなさいよ。御名の偉大さは格別のものだ。その御名がその御方自身を捕まえさせてくれる。純粋さ、素直さ、また、誠実さを持って御名を唱えれば、そのお名前がその場所に現れてくださるんだよ。例えばね、訪問先で会った仲の良い友だちに、真剣に自分の家にも来てくれるように頼んだとしたり、友だちはそこに行って彼とも話すだろう。けれども誰かが乱暴に、『俺のところに来い！』なんて言ったら、絶対にそんな者のところには行きもしないし、むしろ、無視するだろう？ そんな感じだ！

タクール、聖ラーマクリシュナは五聖樹パンチャバタイの杜から部屋にお帰りになった。校長も一緒にいる。信者たちが一人、また一人とやってきた。ラカール、ラトウ、ハリシユ、バララームと、あと三、四人がタクール(訳註3)にプラナーーム(訳註3)を授けて床に坐った。

タクールは、神を信じることに、また、御名の偉大さについて信者達に語られた。

聖ラーマクリシュナ「遍在の神は万物に宿っていらっしやる。そして、その神といっしょに居る者が信者なんだ。神様は離れていらっしやるのではないよ。信者の胸ハートは神様の居場所なんだよ。信者の重荷を神様が背負しってくださるんだ。ほら、ドウルヴァーサ牟尼ムニがドウルヨーダナの招待を受けて満足し、何か願い事をかなえてあげようといった話(訳註4)——邪悪なドウルヨーダナは、パーンダヴァ達が牟尼ムニ

から呪いを受けるように密かに願って、食事をしていないドウルヴァーサ牟尼と一万人の弟子達にド
 ラウパデー(バーンダヴァ)の家で賓客として昼食を食べてくださるように言っただろう? ドウル
 ヴァーサ牟尼が突然現れて、誠実で信心深いドラウパデーは途方に暮れて困ってしまった。困り果
 てたドラウパデーは、この窮地から助けてくれるのは神様だけだということを信じて全身全霊で
 祈った。神様は信者の真剣な祈りを聞いて、居ても立ってもいられなくなったんだよ。信者が本当に
 困り果てていることが分かって、その場に助けに行かれたんだ。

神様へ、熱心さ、素直さ、純粹の念をもって真剣に祈れば、神様は決して落ち着いていられるはず
 がないんだよ。信者達をいつだって困難から助けてくださるんだよ。神様は信者が大好きなんだから

(訳註3) プラナムは目上の人に対する尊敬をこめた挨拶で、両手をあわせて合掌し、かがんで相手の足の塵を右
 手でぬぐい、その手を自分の額に当てまた合掌すると、丁寧な挨拶で、聖者や師に対しては礼拝の意味も含む。
 (訳註4) 太陽神はドラウパデーに、無尺蔵に食べ物を出してくれる器を与えてあった。しかし、日々の食事が終
 わると、それ以上の食べ物は現れなくなるのだった。ドラウパデーは、ドウルヴァーサ牟尼にガンジス河に行っ
 て礼拝を終えてから食事に戻るように言った。この間にドラウパデーの祈りに応えて現れたクリシュナが、彼女
 に食事を乞われた。「食べ物は何もありません」と応えた彼女に、クリシュナは器の中を調べるようにおっしゃった。
 数粒の米とほんの僅かなほうれん草が残っているのが見つかった。クリシュナはそれを召し上がると、水を少々飲
 まれた。すると、満腹になってしまったドウルヴァーサ牟尼と弟子達は戻って来なかったのである。——マハー

ね！」

校長「ハヌマーンのラーマへの信仰は、ほんとうに忠実な信仰でした。ラーマがガルダ鳥の要望でクリシュナの姿になった時には、ハヌマーンのハートにしっかりと焼き付いていたラーマの姿も、ラーマご自身がクリシュナに姿を変えてしまったものだから、自然とクリシュナの姿に変わってしまったほんです」

聖ラーマクリシュナ「そうだ、そうだ！ だからこそハヌマーンは、真の信者だと呼ばれるんだよ。ハヌマーンの様な信者がどこにいる？ 曜日、暦、星座のことなど何も知らない。ただ、ラーマのことだけを想っている。ハヌマーンのような信仰なくして、ラーマを得られたらどうか？ 私が、一つ、一つ、全ての宗教を實踐していた時、ラーマを覚さとりたくて、ハヌマーンの態度を真似ていたものだよ。すると、私の全意識がハヌマーンのようになってしまったほどだ。その時はね、ハヌマーンのようにちよつと飛び跳ねて行き来していたよ。皮も剥むかずに果物を食べていたし——。服の端を尻尾しっぽのようにのぼしておいたんだ。それでやつとハヌマーンになれて、落ち着いたんだよ。

ハヌマーンは忠実で純粹な信仰バクヤによって、ハートにラーマを覚さとったんだ。ラーマ以外のどんなお姿も受け入れられなかった。ハヌマーンにとっては、神はラーマのお姿だけ——。他のどんな姿にも関心がなかったんだよ」

校長「またバーガヴァタに、チャンダーリニー（低い階級）の果物売りの女性の話がございますね。果物売っていてクリシュナの恩寵を授かったという話が——。果物売りは、神々しいお姿で表れた

幼子おきなクリシユナから、『お母さん！』と呼びかけられると感無量となつて、幼子クリシユナを胸に抱きかかえると、祝福に満たされたのでございます。それから、持つていた全ての果物を捧げると、聖クリシユナの素晴らしいお姿を想いながら喜びに満ちて、空っぽの籠かごを頭にのせて家路につきました。果物売りはとても貧しく果物を売つて生計を立てていましたが、クリシユナの恩寵で、道中、籠が宝石などでいっぱいになっていました。籠を下ろして、そこにぎっしり宝石などが詰まっているのを見てびっくり仰天しましたが、それに魅せられることはなかったのです。『今日、私を魅了した青い寶石クリシユナこそ、たった一つの寶石——宇宙の意識の寶石。あの青い寶石に比べたら、こんな寶石なんてつまらないものだよ』そう彼女は思ったのです」

聖ラーマクリシユナ「前世で彼女は、多くの徳を積んでいたんだよ。だから、こんな風に恩寵があつたんだね。そしてその恩寵で、果物売りは聖クリシユナだけが唯一の実在で、他の全ては非現実、彼のマーヤーだという智識を得ることができたんだよ。彼女は、それらの宝石も一時的なものだと知つて捨てたんだよ。

神様はね、人間を誘惑するために富をお与えになるんだよ。富はすべてマーヤーなんだが、本当の神の信者は、この魅惑的なマーヤーには惑わされない。マーヤーの主あるてにしてあらゆる力の権化である神だけを求めるんだよ。人は富を得て金持ちになると我執エゴが大きくなり、支配されてしまうんだ。またこの我執エゴによつて、欲望、怒りなどが頭をもたげる。これによつて人間は墮落してしまい、真実を覚さとる道が妨げられるんだよ。

ある時、人間の体で、目や耳、口などの感覚器官が激しい口論を始めた。各自が、「自分が一番で、自分がいなけりゃ、他の者は何の役にも立たない」と言うんだ。こんなふうだから、彼らは一人ずつ体から出て行ってしまった。道でよく見かけるだろう——盲人、耳が聞こえない人、口がきけない人。でも、これでも分かるだろう。何か一つ感覚器官が機能しなくなつて大丈夫だつてことが——。後になつて、感覚器官がなくても体は機能することが分かつた時、彼らの高慢は粉々になつて恥ずかしくなり、また体に戻つてきた。それから、アートマンが体から去つて行つたとき、彼ら(体の部分)は取るに足らぬものだとすることが分かつた。アートマンこそ、感覚の源なんだよ。

このアートマンは目に見えなくとも、みんなの内に存在する。人間のハートがアートマンの存在する場だ。人間もまた自惚うぬぼれて、『この私がしたんだ！ 私は、これこれの者なんだぞ！』なんて言う時も、アートマンが存在するところ(胸)を指すだろうか？ でも、これは無意識でしていることで、それをちゃんと覚らないことには分かりつこない。アートマンを覚つて、我はアートマンである」という智識を得て初めて、その者は自我エゴから解放されるんだよ。たとえまだ自惚れがあつたとしても、我はアートマンである」と、アートマンを誇りに思つてのことで、こうした自惚れには害はないんだよ。

プラーラプタ・カルマ(前世で行つたカルマの結果)によつて、人間はこの苦惱に満ちた世界(サンサーラ)に生まれてこなければならぬ。カルマの果実の重さで、人間の頭は重く垂たれてるんだよ。もし、人間が望むのなら、このカルマの果実からごく簡単な方法で逃のがれられるよ。信愛バクティを持つて、真剣に朝夕、神様に頭を下げて礼拝プラナムするとしたら——例えばね、誰かの頭に十モナ(370kg)の重荷があつたとし

たら、自分でそれを下ろしたくても下ろせないだろう？ 四、五人の人に手伝ってもらわなくては下ろすことができないね。でも一つ、簡単な方法があるよ——それを下ろす方法がね！ 朝夕、二回だけでも神様に頭を下げて礼拝すれば、その重荷は頭から落ちてしまふよ。そんな感じだ。

だからね、お前たちに言うんだよ。どんな方法でもいいからあの御方を覚るんだよ。あの御方に完全に委ねてお任せする。また、泣いて、泣いて、心の汚れを落とす。純粹な愛をもつてあの御方を覚る。どんな方法でもいいんだ。そうすれば全てわかるよ。いいや、あの御方が分かせてくれるよ。そうなれば、もう彼の全てを忘れさせるマーマーに魅せられることはない。その時、彼の恩寵で、富とは神のマーマー（まやかし）、非現実であるということが分かるよ。その時、神は無限の普遍的存在であるということを感じて喜ぶんだよ。限らない無限の喜びだ。この喜びはね、地上での感覚が知っている喜びではないんだよ。世俗の喜びは、最後には不幸と虚しさをもたらすものだ。でもね、神を覚つた後の喜び、それは決して消えない至福だ。その至福がまた至福を連れてくる。その至福とは、初めもなく終わりもない。神は無限なんだ。だから、神を感じた至福もまた無限なんだよ。限らない永遠の至福、至高の喜び、バラマーマンタだ！」

こう言いながら、タクル、聖ラーマクリシユナは、前三昧に入ってしまった。聞こえないくらい声で、「マー、シヤラナーガタ、シヤラナーガタ、シヤラナーガタ（すべて委ねます）」とおっしゃっている。

みんな、タクルのこの神聖なお姿を見つめている。目には喜びの涙を浮かべ、その涙をぬぐって

いる。

聖ラーマクリシユナが平常な状態に戻られたとき、校長は彼にご挨拶をし、お暇を告げた。心の中でこうつぶやきながら——「無知の暗闇を智慧の光で取り除き、智慧の目を開眼させてくださるグルに、プラナム（礼拝）を捧げます」

タクトール、聖ラーマクリシユナにご挨拶して、校長は、舞堂の端から端までごろごろ回転していた。（訳註、ごろごろ回転——その聖なる場所の塵を自分の体全体につけるために行う）

そして、聖ラーマクリシユナを思いながら、全部のお堂にプラナムを捧げた。